

不登校経験を持つ若者達の もう一つのキャリアパス

第3章 キャリアの接合点 —南丹ラウンドテーブル(3)—

北村 真也



「南丹ラウンドテーブル」の「南丹」というのは、この知誠館のある亀岡市を含む地域の呼称です。そして「ラウンドテーブル」というのは、この地域で青少年の支援に携わっている教育、福祉、心理等の援助者のための学びの機会として 2011 年に自主的に立ち上げられた学びの場です。それが 2012 年からは、京都府の地域力再生プラットフォームとしての位置づけを得て、今日に至っています。

南丹ラウンドテーブル自体は、年 4 回実施され、毎回 3 時間を通したディスカッションをおこないます。その実施においては 2 つの約束が決められており、毎回冒頭でそのことが繰り返し確認されています。一つは、参加者はその所属の一員としてではなく、個人として参加してもらうこと。そしてもう一つは、それぞれが当たり前に考えていることに対してあえて問い直しをおこなうというものです。例えば、日々若者の就労支援にあたっている人があえて「支援とは何か？」ということを考え直してみる、といったことです。この省察的な思考が、支援という大きな概念を揺さぶり、概

念そのものを更新させていくきっかけとなっていくことを期待しているのです。現場に働く人間は、私も含めて現実的な対応に追われ、俯瞰的な視点や大きな概念を更新させることに対しての意識が薄くなりがちです。そこにあえて楔を打ち、さらに自分たちとは違った領域の人たちから、違った角度の意見を求めることを通して、簡単には答えの出せない問いに考えをめぐらせてほしいと思ったのです。具体的な参加者としては、学校の管理職、教員、京都府（青少年、福祉、心理）の職員、児童相談所、保健所、NPO 職員、マスコミ、大学院生、大学生、知誠館の生徒や卒業生、その保護者等が挙げられます。

南丹ラウンドテーブルでは、知誠館代表でもある私が、ここで日々繰り返し広げられる若者たちのエピソードと、それを捉える私たちの社会臨床学的な視点を伝え、それをきっかけとして、参加者によるディスカッションがおこなわれます。そして、その進行は、京都学園大学人間文化学部教授の川畑隆先生にお願いしています。今年度のラウンドテーブルは、それまでとは少し趣向

を変えて「若者のキャリア」ということに焦点化して考えてきました。だから、本稿においてみなさんにご紹介するのは、若者のキャリアというテーマに沿ったラウンドテーブルの記録です。キャリア形成という課題を抱える若者たち、あるいはその渦中を生きている若者たち、そしてそのキャリア形成を支援する、あるいはその決定に関わる大人たち。そのようなさまざまな視点が交差する学びの場の可能性を考えてみたいと思っています。

なお、以下のエピソードに登場する南丹ラウンドテーブルの参加者のうち、塾長は私、北村真也、川畑は進行役の京都学園大学人間文化学部教授の川畑隆先生を指し、他の実名表記は知誠館のスタッフたちです。それ以外の参加者は、個人が特定されないようにすべてアルファベット表記とさせていただきます。また、発言の内容で個人が特定される可能性があるものにつきましては、具体名を省略しています。

3. キャリアの更新性

— トランスフォーマティブ・キャリア —

今年度のラウンドテーブルでファシリテーターをお願いした京都学園大学の川畑隆先生から、次のような振り返りを寄せていただきました。

今年のテーブルには若い人たちが多く着いた。私には進行役という役割を差し引いても、彼らの話を聴くという受身の姿勢が生じ、彼らの話に年長の私が入っていける場所を見つけようとした。

そうしたほうが、3時間後にテーブルを離れるときに、「今日はこの時間を過ごせてよかった」と思える確率を少しでも高められるように思ったのだ。

若い人たちからは考える材料をたくさん貰えた。もちろん、若い人と一口に言っても発言はいろいろにあった。年長の私がいま思っていることや、若い頃のことを思い出して考えることによって想像できる範囲にある（と思える）発言も多くあったが、想像力を駆使して懸命についていながら、私自身の何かが刺激され揺さぶられるようなものもあった。

今年は「キャリア」がテーマであった…というよりは、狭義ではなく広義のそれはずっとテーマであり続けている。今年も入口は「就活」という狭義ではあっても、中身は「生き方」という広義に広がっていった。とくに私を揺さぶった数名はすんなりとストレートに今に辿り着いているわけではないし、今も不確実な状況にある。彼らの話を聴きながら、私は次のようなことを心に巡らせていた。

…あなたたちは自分自身をとて「頼り」にしている。自分の感覚や考えにどうもフィットしない状況を経験することによって、よりフィットする状況を手に入れようとする。そうしていくうちに、捨てるもの、手に入れ続けていきたいものが自分のなかでより明確になり、そして今度はそのフィットする状況を自ら作り出していこうとするのだ。つまり、目の前の状況が不利なものであってもそこを回避せずに自分との関係のなかで意味づけ、自分の生き方を展開していく起点としている。傍らには、安定した生活を確実にしていくような進路を求める気持ちが皆無ではなからう自分や、そういう確実性を推す周囲からのプレッシャーがあるにもかかわらずだ。確実性を推す一般論

ではなく、あなたたちが自分自身を頼りにした個別論に入っていく勇氣はどこからくるものなのだろうか。

周りからのプレッシャーを背負い続けていては不自由だと思う。だから、そのようなプレッシャーさえ若者に届けなければ若者は自由にふるまえるのではないかと考えてみても、そんなことはないだろうと思う。不自由さに依存することによってある意味で楽になれる。親や周囲もその不自由な悩める若者に依存して、確実性のない時代への自分自身の不安を和らげようとしている。生きていくうえで「危険な賭け」をそのような共依存によって素通りし、「残り物の福」を狙おうとする。そこには、若者だけでなく、親や周囲の大人たち自身も自分の生き方（広義のキャリア）を問わざるを得ない一瞬がある。

それに対してあなたたちは自由で強く見える。なぜ自分をそんなに頼りにできるのだろうか。信じられる自分なりの価値を、決して頑固ではなくブレないものとして自分のなかに置き続けられることの「そだち」は、もしかしたら、あなたたちが世の中のニッチな（隙間の）ところを生きながら、そのニッチなところにあるものを見続けてきたことによるのではないだろうか。そうじゃないと、そんなに地に足のついたところで自分の人生を進めていけない。…

私を揺さぶった数名を買い被っているとは思わない。「ニッチ」を一般論的な整合性から漏れ落ちるリアリティと捉えると、数名はそれぞれにそのリアリティを掬っているように思えた。もちろん、テーブルに着いたこと自体からわかるように、彼らの力はずいぶん社会化されている。しかし、彼ら以外にも、まだ社会化せずに眠っているリアリ

ティの宝庫があちらこちらに隠されていることだろう。

援助者として何をそだて、そのために援助者自身もどうそのそだちの材料になれるのか。来年度もそれを求めて集うことになる。

川畑先生の振り返りから、先生自身が若者たちの語りに刺激を受けつつ、自らを振り返りながら様々な思いを巡らされていることがうかがえます。そう言えば、ストレーターではない若者たちをゲストに迎えたラウンドテーブルでは、若者たちの語りに参加者の感情が呼び起され涙を流したり、参加者自身が胸の奥にしまっていた物語を話し出したりと、その場自体が独特の雰囲気包まれていたことを記憶しています。

いったい、何がそうさせるのでしょうか？挫折体験を持っており、そこから様々な形で自分たちのキャリアを形成してきた若者たち。彼らの物語がストレーターとして生きてきた援助者たち、あるいはその他の大人たちの人生の物語の、抑圧され、蓋をされてきた影の部分に存在しているもう一つの物語と、どこか同調していくのかもしれませんが。彼らの語りを通してその蓋が外され、そこにしまわれていた感情が動くというのはわかりやすい話かもしれませんが。どこかに同調が生じていくのかもしれませんが。そうして若者の経験と参加者の経験が出会っていきます。そしてそこに今度は、参加者自身の振り返り、省察的思考が生まれていくのです。

支援と被支援、あるいは援助と被援助と

いう関係は、ここでその明確な境界を失います。本来の援助モデルは、援助者から被援助者へと何らかのサービスが伝えられていくものですが、このラウンドテーブルでは、被援助者である若者たちの語りに援助者たちが同調し、しかもそこから省察的な問いを生じさせていくのです。ここでは、情報の流れが通常と逆になっていきます。そうすると、援助、被援助という関係さえ揺らぎ始めます。支援そのもの、あるいは援助そのもののあり方を援助者自らが問う。すなわちそれは、援助者が自分のキャリアをあらためて問いなおしすることに他ならないのです。そしてこの過程を、私たちはトランスフォーマティブ・キャリア（変容するキャリア） *transformative career* と呼んでいます。

定型的な支援や援助のアプローチは、若者たちを、少しでも「普通の若者」へと近づけようという意図のもとに作られているように思います。しかし、彼らは本当に普通の若者として生きていくことを望んでいるのでしょうか？あるいは、それが彼らにとって最も望ましいことなのでしょうか？実はそこがあいまいになっているのではないかと思います。就活の渦中の学生たちを呼んでその生々しい状況を語ってもらおうと決めた時、私の中には援助者たちがその生々しさを知らないのではないかという疑問がありました。それを知った時、援助者たちの間に、そんな就活の渦中へと若者たちを向かわせることに対する疑問が自然と生まれるように思ったのです。

若者への支援を考えた時、そこにはいつ

も「課題を抱えた若者」、「問題として対処が求められる若者」がいるように思います。彼らは問題を抱えているからこそ、心理的なケア、医療的なケア、あるいは福祉的なケアが必要と判断されるのです。しかし本来、問題は社会と若者たちとの関係の中に生じていきます。そこには、「課題を抱えた社会」があり、「問題を抱えた社会」が存在します。だからこそ、社会の側にも省察的な思考が必要であり、社会そのものが社会のあり方そのものを問うていくような機能がないといけないと思ったのです。

目の前の答えが将来を保証できなくなった時代においては、キャリアそのものを絶えず検証しそれを更新していくことが求められます。それは若者個人にも求められることでしょうし、社会そのものにも求められることなのです。

